AMAKUSA1637武力介入

未熟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＡＭＡＫＵＳＡ１６３７武力介入

【Ｎコード】
Ｎ０６９７Ｈ

【作者名】
未熟

【あらすじ】
聖フランチェスカ学園生徒会メンバーは修学旅行の為船上にいたが、突然の嵐により流された所は江戸初期、島原の乱直前の九州であった。バラバラになった生徒会メンバーであったが、一人また一人と合流し未来知識を活用し原城の悲劇を阻止せんと有力大名を味方につけ、時の将軍家光との会談に漕ぎ着けたと思ったその時歴史はまたも生徒会メンバーを翻弄する。

第一話　嵐の前の（前書き）

始めに、当作品は赤石路代先生のＡＭＡＫＵＳＡ１６３７に中山屋の妄想を注入した作品でございます。
くれぐれも納得された上で未熟な作品ではありますがお読みいただければ幸いです。

第一話　嵐の前の

１６３７年某月某日
北九州小倉城郊外　松平忠直軍（旧島原一揆軍）本営

天草四郎こと早弓夏月
宮本武蔵こと宮本政希
堀江栄司（機械担当）
八塚直純（富岡城代）
春日野英理（歴史担当）
安芸島聖香（外国語堪能）

　平成の御世から飛ばされて来た聖フランチェスカ学園生徒会メンバーは、その知力を使い島原に攻め寄せた幕軍を鍋島・黒田の加勢により撃退し、その後小倉へ向かう途中細川も味方になりついで嵐で亡くなったと思われた松平忠直公が現れた事により島津をも味方に付け幕府・諸藩が篭る小倉城を包囲していた。
松平軍の勝利は最早確実と思われていた。
また、四郎（夏月）との出会いにより心動かされた柳生十兵衛の働きにより征夷大将軍である家光と馬関海峡でのオランダ船上にて会談する事が決まった。
しかし、明日はその会談と言う日にそれは起こった。
その日朝早く、家光からの使者が本陣に参り江戸からの強行軍の為上様は体調を崩したので今しばらく待って欲しいと伝えて来たのであった。

松平本営では、土壇場になってのこの事に謀略ではないのか、戦力を増員しているのではと疑念が飛び交った。
しかし、四郎の考えはあくまで交渉によるこれ以上血を流す事を阻止する為であり本営に居た全員の気持ちもまたそうであった為、会

談は延期と言う事になった。
無論、延期に納得した裏には松平軍参謀英里の指摘があった。
水軍戦力による制海権の確保、国内に僅かな数しかないにも係わらず多数の大砲を所有している事、鍋島の鉄砲、そして徳川家の血筋を引く忠直公の存在と言うこちら側の有利と東日本各地で起きていると言われる一揆の情報により長期戦は不可能であると言う考えがあったからだった。

夏月ら生徒会メンバーはしかし、歴史が変わっている事を忘れていたのかも知れない。
島津家の当主光久は夏月らの歴史ではまだ当主ではなく代理であり、父は生きていたがそうではない、鍋島や黒田にしても大なり小なり歴史は違っている事を勝利と目前の家光との交渉の為誰もが気に留めて居なかったのだ。
無論、気に留めていたからと言ってこの後に起きる“事”の前には大した役には立たなかっただろう。

第一話　嵐の前の（後書き）

拙いながら架空大河物語として書いていこうと思っております。
ご意見ご感想ありましたらどうぞよしなに。

長崎来航

家光からの使者により、会談が延期になった日から二日が過ぎた頃にそれは来た。

長崎出島に船団現ると言う佐賀からの早馬であった。

松平本営では速やかに忠直公を議長にした鳩首会談が開かれ善後策が練られる事となった。

忠直「鍋島殿、一体船団と言うのはどこからの船団なのですか？」
鍋島「それが・・・」
鍋島公は一言言うと手紙を忠直公に渡した。
忠直公は手紙を読むにつれて顔色が青くなっていた。

忠直
「まさか蝦夷守（えぞのかみ）が来るとは」

大名衆＆宮本・八塚
「！！」

夏月（四郎）
「あの、忠直様一体“蝦夷守”とはどう言う方なんですか？」

忠直
「四郎殿はご存知ではなかったんですか？」
「蝦夷守と言うのはその名の通り蝦夷地を所領にする日ノ本一の尊皇忠幕の者です。」

英理
「えっ!!そんな」

忠直
「軍師殿もご存知では無かったのですか?」

英理
「えっ、あ、はい」

忠直
「蝦夷殿は、一言で言うなら容赦や慈悲と言ったモノの無い御方です。」

夏月（四郎）
「容赦や慈悲が無い?」

忠直
「ええ、信長公の下で武勲を挙げ太閤殿の下唐入りで明・李氏の同盟軍を撃退した御方です。」

英理
「明の大軍をですか!?いったいどうやってですか?」

忠直
「・・・焦土戦です。蝦夷殿は信長公の下で比叡山、伊勢長島一向一揆、本願寺や京の都で火を放ち毒を川や井戸に撒き、南蛮砲を用いて夜間打ち続けたのです。周囲の村や町も利敵行為をしたとして焼き払ったのですよ。」

夏月（四郎）
「そんな」

黒田
「四郎それればかりじゃないぞ、対価を払って降るならば慈悲を掛けると言い近衛等の公家衆まで使い金や武器を供出させ開城させ、出てきた本願寺の徒達をその場で皆殺しにしたぐらいだからな」

島津
「義弘公が唐入りの為朝鮮へ出兵した際にも小西勢を始め諸大名衆が北上する中、李朝首府漢城を始め我々が抑えた地では、抑えると同時に速やかに領主や地主と言った者達を一掃し徹底した収奪を行い食料は民に分け与え・税は廃止一揆の芽を摘みとりもしております。」

英理
「進攻して手に入れた土地の領主と民を分断し領主からはすべてを奪い民には食料の分配と税の廃止で味方に付ける。分割統治の実践ですね。」

島津
「左様、英理殿の仰る通りです。私は江戸に居た時に蝦夷守からじかに聞きました
「分断して統治するそれが最良である」と。」

夏月（四郎）
「でも慈悲とはかけ離れている方と言うなら、なぜ税の廃止やといった事までするのですか？」

八塚

「簡単な話さ、北上した軍勢は明の軍勢に押されて退却せねばならないが、それまでに朝鮮の農民に一揆を起こされたら面倒だからさ。」

宮本
「漢城や釜山の守りを固め、南下してきた明の大軍を攻城戦で足止めさせ、背後に水軍を使い逆に平壌を落として明軍を包囲したぐらいだからな」

八塚
「平壌で持ち堪えている間に九州より援軍として来た徳川や伊達と言った新手の軍勢で明軍は大敗したそうだ。」

夏月「・・・その後は一体どうしたの？」

忠直「朝鮮国の北から南まで収奪出来る物すべてを釜山に集め、以後は釜山を守り続けました。」

鍋島「太閤殿は莫大な戦利品に気を良くされ、蝦夷殿始め諸大名の偽りの報告を死ぬまで信じておりました。」

十兵衛
「つまり、一番厄介な者が出てきたと言う事だ。」

「・・・」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0697h/

AMAKUSA1637武力介入

2010年10月14日12時09分発行